

フランス国立図書館の端緒、ルイ9世の図書館—シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と19世紀の建築—

The origin of the French National Library, the Library of Louis IX: the Treasury of the Sainte Chapelle in the *Palais de la Cité* and the French architecture in the 19th century

白鳥 洋子
Shiratori Yoko

キーワード：フランス国立図書館、ルイ9世の図書館、サント＝シャペルの宝物庫、アンリ・ラブルースト、フランス19世紀の建築

Keywords : French National Library, Library of Louis IX, Treasury of the Sainte Chapelle, Henri Labrouste, French architecture in the 19th century

As the origin of the French National Library, I will reveal the existence and architectural characteristics on the Library of Louis IX, that is, Sainte Chapelle's Treasury which is unidentified. And moreover, I will contemplate the relationship between this Treasury and French architecture in the 19th century including Henri Labrouste.

1. はじめに

フランス国立図書館(Bibliothèque Nationale de France)は、フランソワ・ミッテラン図書館(Bibliothèque François Mitterrand, 1989-1994)の開館(1996)に伴い、フランスの国立図書館の再編成が成され、蔵書の整理と収蔵場所の変更が行われた。現在のフランス国立図書館はフランソワ・ミッテラン館(Site François Mitterrand)、リシュリユー館(Site Richelieu)¹、アルスナル図書館(Bibliothèque de l'Arsenal)、オペラ座図書館博物館(Bibliothèque-Musée de l'Opéra)の4つの場所にあり、複数の大小の図書館により構成されている²。これを機に2区のリシュリユー通り(Rue de Richelieu)にある、アンリ・ラブルースト(Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875)³が設計したことにより著名な旧パリ国立図書館(Bibliothèque nationale, 1854-1875)、現フランス国立図書館リシュリユー館は2007年から大規模な改修工事が行われた。比較的新しい書籍はフランソワ・ミッテラン館に移送され、リシュリユー館には写本や版面の貴重書や図版、メダルなどの貴重品、芸術と演劇に関する資料と書籍が残された。それらに加えて、リシュリユー館には国立芸術史学院属図書館

(INHA, Institut National d'Histoire de l'Art)、古文書学校附属図書館(Bibliothèque de l'École des Chartres)などの芸術と古文書に関連する図書館が新たに移設され、異なる組織の図書館が共存する複合施設となった。

このパリ国立図書館改修計画は同図書館総館長ブリュノー・ラシーヌ(Bruno Racine)の下に行われ、建築の総責任者は建築家ブリュノー・ゴードン(Bruno Gaudin)⁴であり、2007年に同図書館改修工事総監督者に任命された。2010年から改修工事が開始され、ラブルーストの大閲覧室と中央書庫は10年間の工事を経て、今年2017年に竣工した。この改修工事の全体計画は一期と二期に分けられ、一期はラブルーストの設計による「ラブルーストの間(Salle de Labrouste)」を中心とする西半分であり、二期はジャン＝ルイ・パスカル(Jean-Louis Pascal, 1837-1920)による「楕円の間(Salle Ovale)」を中心とする東半分である。これから第二期の工事が行われる予定である。

ラブルーストの設計による旧大閲覧室(Grande salle des Imprimés)⁵は現在、歴史的記念建造物に指定され、彼の名前が与えられて「ラブルーストの間」となった。アンプリメ(Imprimés)は印刷物を示し、写本(Manuscrits)ではない印刷による書籍を示している。ラブルーストの設計による大閲覧室と中央書庫(Magasin central des Imprimés)は主に印刷による書籍を収蔵し、グランド・サル・デ・ザンプリメ(大閲覧室)は直訳すると「印刷物の間」である。この閲覧室は、同じく彼の設計である旧中央書庫と共に、国立芸術史学院(INHA)の蔵書が収蔵され、芸術を専門とする図書館として開館し、一般に公開された。この大規模な改修を契機に旧パリ国立図書館の設計者であるラブルーストはますます人々の注目を浴び、その価値は高まり、様々な方面から活発な研究が行われている。

一方、フランス国立図書館の歴史は長く、その詳細は大変複雑であり、また意義深い。その源流の一つは各時代のフランス国王の蔵書による王立図書館と、宰相の蔵書による図書館であり、もう一つは中世の修道院とパリ大学、大聖堂の付属図書館である。一般的にフランスの王立図書館の系譜はシャルル5世(Charles V, 1338-1380)⁶の「王の図書館(Bibliothèque du Roi)」が起源とされている⁷。しかしながら、これ以前の図書館として、サント＝シャペル(Sainte-Chapelle, 1241/42-1248)の建造者として著名なルイ9世(1214-1270)⁸の蔵書と図書館の存在に関する言及がしばしば見られる。⁹また、この図書館の建築的な全貌は謎であり、明らかでない。本稿ではこのルイ9世の図書館に着目し、その存在や建築的な特徴を明らかにすることを目的としている。さらに、フランスで最初の独立した建物による国立の図書館が建設された19世紀のラブルーストを中心とする建築家達と、ルイ9世の図書館との接点を検証し、その関係性について論考を進めることとする。

2. フランス国立図書館の礎と系譜

一般的にフランス国立図書館の起源とされるシャルル5世の図書館は、彼が1336年に書籍をシテの王宮から中世の城塞であったルーヴル(図1)の北西のラ・フォーコヌリー塔(tour de la Fauconnerie)¹⁰の中に移し、王の図書館を開館したことに始まった。彼は1500年のイタリア戦

争によるミラノ征服の際に同地の貴重書をフランスに持ち帰り、蔵書を豊かにした。次の国王ルイ12世 (Louis XII, 1462-1515)¹¹ はブロワ城 (Château de Blois) の中に1501年に王の図書館を設け、彼もイタリア戦争を継続し、その際に没収したペトルカカの写本やギリシア語の写本を所蔵し、ブロワ城の図書館で豊かな蔵書を築いた。彼はイタリアの文化を導入し、ブロワ城ではフランス・ルネサンスの文化を開花させた。フランソワ1世 (François I^{er}, 1494-1547)¹² は書籍をフォンテーヌブロー城 (Château de Fontainebleau) に移し、王立図書館を設置した。フランソワ1世は1537年のモンベリエの勅令によりデポ・レガル (納本制度、dépôt légal)¹³ を定め、蔵書は飛躍的に豊かになり、フランスの王立図書館はヨーロッパ随一のものとなった。

一方、宰相の図書館として最初のもはマザラン図書館であり、リシュリユー (Armand Jean du Plessis, Cardinal et Duc de Richelieu, 1585-1642)¹⁴ の死後、その後継者であったジュール・マザラン (Jules Mazarin, 1602-1661)¹⁵ は1647年にマザラン図書館を開設し、統治中の資産と収集品を収蔵し、これを「学ばんとする全ての人々のために」公開した。この図書館はプティ・シャン通り (Rue des Petits Champs)、リシュリユー通り (Rue de Richelieu)、コルベール通り (Rue Colbert)、ヴィヴィエンヌ通り (Rue Vivienne) に囲まれた街区に建設された。つまりその街区は旧パリ国立図書館、現国立図書館リシュリユー館の敷地であり、マザラン図書館は19世紀のパリ国立図書館の建築としての起源であった。リシュリユー館には現在もマザラン図書館時代の建築であるギャルリー・マザラン (Galerie Mazarin) が現存し、その栄華を今日に伝えている。以上がフランスの王と宰相による図書館の系譜の概略である。フランス国立図書館の蔵書は王立図書館、宰相の図書館の蔵書に加えて、フランス革命以後、革命によって没収された貴族、修道院の蔵書が加わり、これらが今日のフランス国立図書館の蔵書の礎を築いている¹⁶。

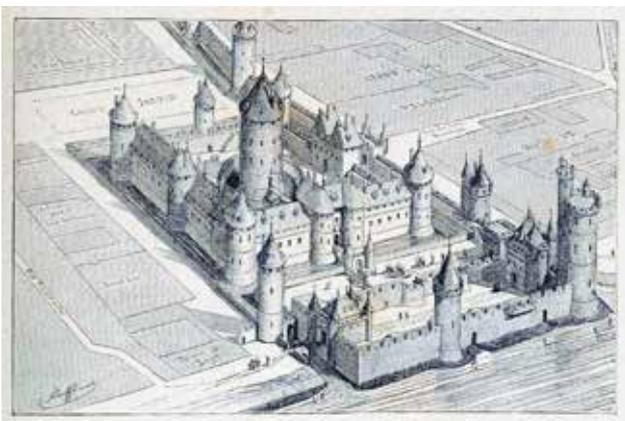


図1：テオドール・ホフバウアーによる13世紀のルーヴルの復元。左一番目の塔が、シャルル5世の図書館があったとされるラ・フォーヌリーの塔。

3. 中世のシテ宮内のルイ9世の図書館

3-1. サント＝シャベルの建造と宝物庫の図書館

聖ルイで知られるルイ9世はカペー朝のフランスに経済、文化芸術の発展に貢献し、同時に愛書家として知られる。王の年代記にはルイ9世は蔵書の空間である図書室を持っていたとする記録が下記のように残されており、ここからは厳密にはルイ9世はシャルル5世以前のフランスで図書館を持っていた王であると考えられる。この図書館に関して王の年代記作者は「かつて善き王ルイ9世が海外にあったとき、サラセン¹⁷の大王が自国の哲学者達の役に立つようなすべての本を、自分の図書館に捜し集め、書き写し、並列させたことを聞いた。王は自分の礼拝堂の宝物庫の中に一室を設け、そこに彼の本を並べた。暇などときには自分でもここに勉強しに来る他、ここで研究することを願ひ出る者達には、喜んでこれを許した」¹⁸とする図書館の記述を残している。ルイ9世紀の蔵書は彼の死後に散逸した。この記述からは、ルイ9世は王宮のサント＝シャベルに付属する宝物庫に自身の図書館を設け、官吏達にも蔵書の閲覧を許可していた様子を理解することができた。彼がイスラムの図書館に倣って自身の図書館を設けたとする背景は十字軍の敗北と捕虜時代であり、彼はサント＝シャベルの竣工の後、1248年の第7次十字軍ではアイユーブ朝のエジプトに遠征したが、敗北して捕虜となった。彼はエジプトのマンスーラの捕虜時代にイスラムの文化や風習に触れていた¹⁹。

中世カペー朝の王宮、シテ宮 (Palais de la Cité)²⁰ はパリのシテ島の東端、現在のパレ・ド・ジュスティス (裁判所、Palais de Justice, 1840-1875) の場所にあり、一般的にシテ宮と呼ばれている²¹。その多くは取り壊され、現在見られるような状態へと建て替えられているが、マリー・アントワネット (Marie-Antoinette, 1755-1793) が処刑前に投獄されたことで著名なコンシエルジュリー (Conciergerie) など、中世の建築が部分的に現存している。「自分の礼拝堂」とはサント＝シャベルを示している。サント＝シャベルはキリストの聖遺物であるいばらの冠を納めるためにルイ9世の命により建造された礼拝堂であり、サント＝シャベルは現在もパレ・ド・ジュスティスの中に組み込まれている。詳細は後述するが、このサント＝シャベルもパレ・ド・ジュスティスもラブルーストに近い19世紀の建築家達が関わっている。

3-2. ルイ9世とサント＝シャベル

ルイ9世が建造したサント＝シャベル²² はシテ宮内の王宮付属教会堂であり、フランス13世紀レイヨナン (Rayonnant) 様式²³ ゴシックの代表的作品である。レイヨナン・ゴシックの小規模な礼拝堂の最高傑作とされている²⁴。レイヨナンは「光りを放つ」、「輝かしい」や「放射状」の意味を持ち、壮大で華麗なばら窓の放射状の繊細な意匠に由来する。壁面のほとんどが色鮮やかなステンドグラスで覆われ、内部は宝石箱のような美しさである。ステンドグラスのトレサリー²⁵ は極度に細く繊細で華麗な装飾に特徴がある。控え壁による構造が高技術であり、明快で壁面を感じさせない構造に特徴がある。主体構造の控え壁は小口の見掛りが内部に向き、さらに内部ではそれが複数の

極めて細い付け柱により隠されている。そのため、内部はステンドグラスと細い柱による空間であり、石造とは思えない繊細さと軽やかさである。内部は上下の二層に分けられ、上層は王のための礼拝堂であり、下層は宮廷の官吏達のためのものである。詳細を後述するが、サント＝シャベルと宝物庫は控え壁の仕組みや平面や断面の構成において同じ特徴を持っていた。

4. サント＝シャベルの宝物庫

4-1. 宝物庫の場所

1550年に制作された「パリの都市図」(図2)には中世の名残を残すパリが描かれている。シテ島西端にカペー朝時代の王宮の様子が描かれ、この都市図からは、王宮全体が城壁に囲まれ、その中に南から王宮広場、サント＝シャベル、コンシエルジュリーや旧王宮広間、中庭などの位置関係を確認することができる。セーヌ川にかかる橋の上には建物があり、有機的に線を描く街路などから16世紀中頃においてもパリは中世の街並みを良く残していたことを知ることができる。

一方、1754年にドラグリーヴ修道院長(l'abbé Delagrive, 1689-1757)²⁶により作成された「シテの都市詳細図(Plan détaillé de la Cité)」²⁷(図3)を確認すると、サント＝シャベルの北側に小さな建物が描かれ、そこには「宝物庫(Trésor)」と明記されている。これによりルイ9世の図書館があったとされるサント＝シャベル宝物庫は、この詳細図に「宝物庫」と記されたサント＝シャベル北側にある建物であると確定して良いであろう。ドラグリーヴは18世紀フランスの幾何学と作図、地理学の発展に貢献し、この分野の第一人者であった。同都市詳細図はパリ市長、ルイ・バジル・ド・ベルナージュ(Louis Basile de Bernage, 1691-1767)とパリ市議会に献上された。彼の作成した地

図は幾何学として正確であり、大変美しく精密であり、学術的な信頼が高い。トラグリーヴの詳細図は幾何学的に描かれた最初のパリの地図である。

この詳細図には、王宮大広間(Grande salle du Palais)、コンシエルジュリー、サント＝シャベル、王宮広場が描かれており、往時の様子を理解することができる。王宮大広間やコンシエルジュリーは北側に位置し、中央にサント＝シャベルと王宮広場(Cour du Palais)に位置するなどの全体の配置、王宮とサント＝シャベルはギャラリーにより繋がられていたことを確認することができた。このギャラリーは「メルシエの間(Salle au Merciers)」または「メルシエのギャラリー(Galerie au Merciers)」と呼ばれる建物であり、これにより王族や官吏達は外を通ることなくこの礼拝堂へ往來することができた。「メルシエ」とは高級小間物を扱う商業集団であり、その長は市議を務めた。直訳すると、「手芸裁縫材料の商人」である。中世のパリでは市長や市議は大商人から選ばれ、パリ市長の職名は「プレヴォ・デ・マルシャン(Prévôt des marchands)」であり、は直訳すると「商人の長」である。

さらに、中世建築への造詣が深い19世紀の建築家、画家であるテオドール＝ジョゼフ＝ユベール・ホフバウアー(Theodor-Josef-Hubert Hoffbauer, 1839-1922)によるシテ島の王宮に関する復元研究(図4)²⁸では、1380年頃の王宮の平面図が示されている。王宮は城壁に囲まれ、サント＝シャベルの北側には、ドラグリーヴのシテ詳細図と同様に、小さな建物が描かれ、そこにも「宝物庫(Trésor)」と記されている。

4-2. 宝物庫の平面の特徴

上記の都市図からこの宝物庫の平面の形状を確認することができ、そこからは控え壁の構造の仕組みなどがサント

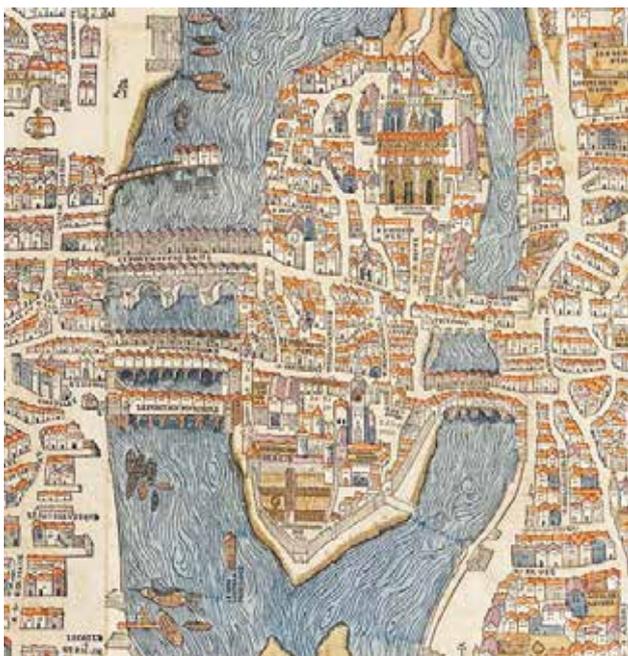


図2：1550年頃のシテ島。トゥルシェとオワイヨの都市図、部分。北が左。中ほどの下に王宮があり、サント＝シャベルが描かれている。



図3：1750年頃のシテ島の王宮。ドラグリーヴの「シテの都市詳細図」(1754)、部分。上が北。中央に右寄りに王宮とサント＝シャベルが描かれている。

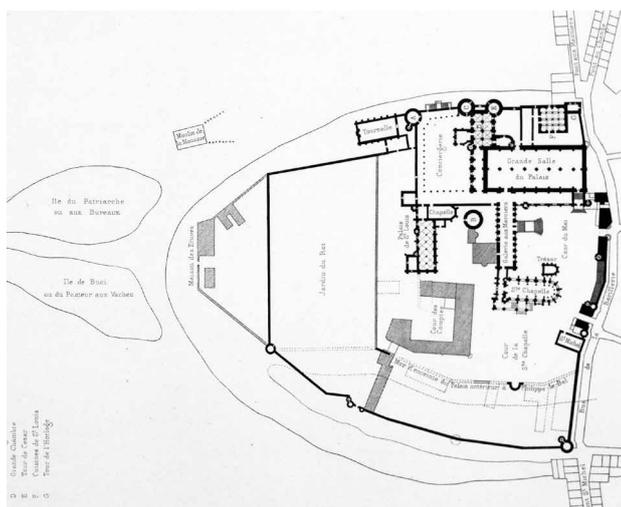


図4：1380年の王宮の復元研究。テオドール・ホフバウアー、『時代を通じたパリ』（1875-1882）の図版。北が上。サント＝シャベル北側に宝物庫が記されている。

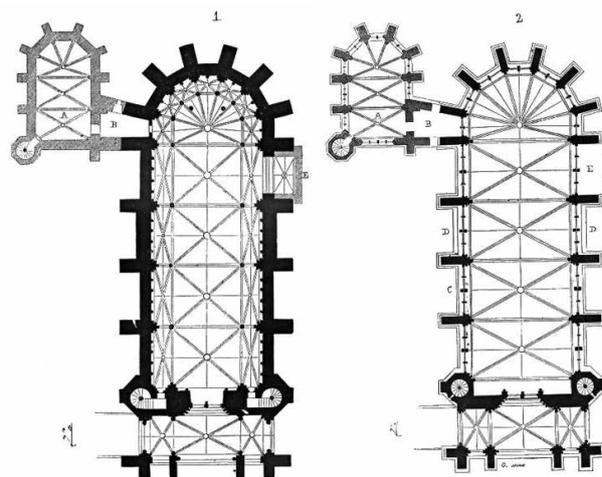


図5：ウジェーヌ・ヴィオレール＝デュク、宝物庫を含むサント＝シャベルの平面図、右が1階、左が2階、『11世紀から16世紀のフランス建築の論理的辞典』、1854-1868。

＝シャベルに類似し、概ねサント＝シャベルが縮小されたような様相であったことを理解できた。サント＝シャベルの影により南からの直射日光が避けられていて、宝物庫や図書館に適した配置となっている。高密度であった中世パリにおいて広場は貴重であり、建物で囲まれた王宮広場は静謐な空間であったことが想像される。ルイ9世の図書館は中世パリの大変恵まれた場所に建っていたことを理解することができた。加えて、小さく繊細な宝物庫が美しいサント＝シャベルと並んで建つ様子には愛らしい姿を想像することができる。

宝物庫の平面図については、ウジェーヌ・エマニュエル・ヴィレール＝デュク（Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879）が『11世紀から16世紀のフランス建築の論理的辞典』（1854-1868）²⁹のサント＝シャベルの解説において、この平面図は宝物庫に関する最も詳細な図面の一つである。この平面図からは、この宝物庫はサント＝シャベルと同様に控え壁の内側端部が細くなっていることや、窓の中央部にトレサリーを有していることなどを理解することができる。加えて、交差リブ・ヴォールトによって天井が造られていることが分かり、これもサント＝シャベルと同様である。内部の隅部の小さな階段により上下階のアクセスが可能になっている仕組みもサント＝シャベルと同様である。宝物庫は2層であり、各階とも小さな廊下によりサント＝シャベルに直接連結されている。上階ではサント＝シャベルの上階礼拝堂の周歩廊から、下階でもサント＝シャベルの下階礼拝堂の周歩廊から、各々直接宝物庫に入室ができるようになっている。上階が王の礼拝堂であり、下階が官吏の礼拝堂であったこと、官吏達に書籍の閲覧を許可していたことなどを考慮すると、上階には王と礼拝堂が所有する公文書や貴重品を所蔵した宝物庫があり、下階には図書館があったことを類推することができる。

4-3. 宝物庫の外観

ルイ9世の図書館を含む宝物庫の平面形式は18世紀のドラグリーヴの地図からサント＝シャベルに近いことが

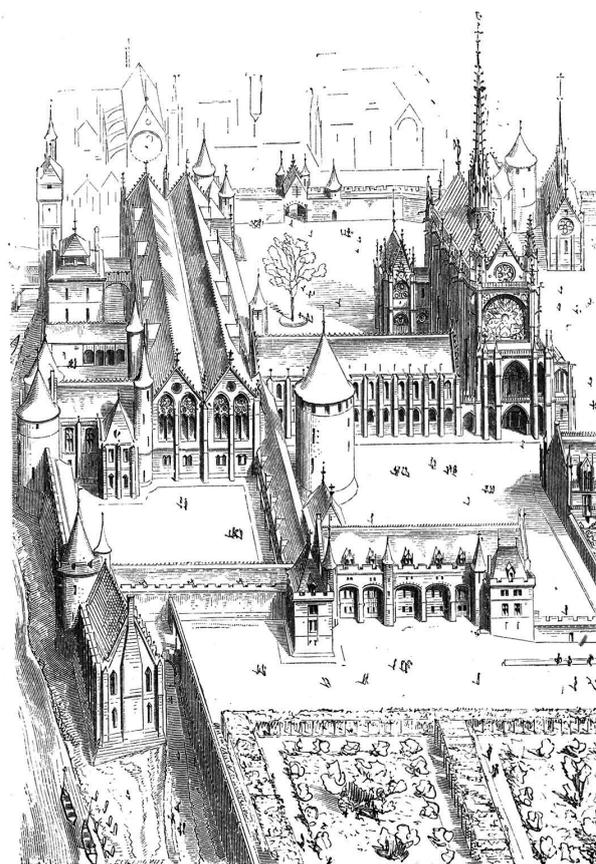


図6：ウジェーヌ・ヴィオレール＝デュク、シテ宮の鳥瞰図、『11世紀から16世紀のフランス建築の論理的辞典』、1854-1868。

理解でき、ホフバウアーやヴィレール＝デュクの復元研究からは19世紀の研究者たちも同様な判断をしたことが理解できた。宝物庫の外観に関しては、ヴィレール＝デュクは前述の『11世紀から16世紀のフランス建築の論理的辞典』の宮殿の項でシテの王宮を取り上げて、鳥瞰図（図6）を掲載し、その図版にはサント＝シャベルの北隣に宝物庫を描いている。13世紀のルイ9世の時代の王宮の様子を

解説したこの項では、ヴィレール＝デュクスの復元した宝物庫の外観を理解することができた。ここでは宝物庫はサント＝シャペルと同様な繊細なトレサリーが施された状態で描かれている。一方、この図版ではサント＝シャペル上部の塔が描かれているが、これは修復の際に付け加えられたものであり、オリジナルとは異なっている。

他にも宝物庫に関する幾つかのデッサンや版画などの絵画的資料（図7～図9）が見付かり、それらは主に18世紀後半から19世紀中頃にかけてのものであり、宝物庫の外観を知ることができる。「古のパリ、パレ・ド・ジュスティス」（図7）は19世紀の画家、石版画家、ユベール・クレルジェ（Hubert Clerget, 1818-1899）によるデッサンである。版画「パレ・ド・ジュスティス、1660年のパリ」（図8）はクレルジェのデッサンと構図が著しく類似し、彼は石版画家でもあったことから、前者は後者の元絵であったなどの関連性が残される。詳細は後述するが、宝物庫は18世紀末に取り壊されていることから、これらの絵画は研究によるものである。

これらの図版では宝物庫の外観はサント＝シャペルに類する繊細なレイヨナン・ゴシック様式で描かれ、その外観には19世紀の人々の研究の成果を理解することができる。宝物庫の構造はサント＝シャペルと同様に控え壁によるものであり、それ以外の壁面はなく窓であり、縦長の控え壁と窓がファサードの縦方向の意匠となっている。これは前述のホフバウアーやヴィオレール＝デュクスの見解と一致している。ファサード横方向の意匠は三つの層となっている。両者は屋根の勾配も含め、同様のプロポーションであり、全体として王宮広場に大小の類似するレイヨナン・ゴシックの建築が並ぶ構成となっている。両者は渡り廊下で結合され、外を通ることなく往来ができるようになっている。一方、これらの図版では、前述のメルシエの間がゴシックの建築として描かれていて、ゴシック建築の技術と意匠が教会建築のみならず、周囲の他の王宮の建築にも採用され、ゴシック建築の集合体の復元研究の事例として興味深い。

宝物庫が最も詳細に描かれている図版は、「古のパリ。パレ・ド・ジュスティス、5月広場を囲む建物の取り壊し」（図9）であり、ここでも宝物庫の窓はサント＝シャペルと同様な繊細なトレサリーを持ち、レイヨナン・ゴシックの特徴を良く示した建物として描かれている。総じてこれらの図版からは、ルイ9世の図書室があった宝物庫が、19世紀の中頃、ラブルースト達の時代に絵画や版画の題材として描かれていた様子が明らかになった。

4-4. 宝物庫の取り壊し

ドラグリーヴの詳細図が1754年と年記されていることから、この宝物庫は少なくとも1750年頃、18世紀半ばまで王宮広場に残っていた判断される。加えて、これらの図版からは往時の王宮広場、現5月広場が三方をゴシックのファサードで囲まれた広場であったと思われる。旧王宮広場はサント＝シャペルと宝物庫の後方にある、広場正面の建物は「メルシエの間」、広場右側の建物は「皇太子妃の間（Salle Dauphine）」であり、19世紀ではこれら全てがゴシック建築であったと考えられていたことが分かった。現在の、壮麗な5月広場のファサード（1783-1786）は18



図7：ユベール・クレルジェ、「古のパリ、パレ・ド・ジュスティス」、19世紀中頃。



図8：「パレ・ド・ジュスティス、1660年のパリ」。



図9：「古のパリ。パレ・ド・ジュスティス、5月広場を囲む建物の取り壊し」。

世紀末に再建されたものである³⁰。ローマ・ドリス式とフランス・ルネサンスの意匠を合わせ持ち、フランス新古典主義の建築の例の一つである。「メルシエの間」は1776年の火災により大きな被害を受けていた。再建の建築家はギヨーム＝マルタン・クチュール（Guillaume-Martin Couture, 1732-1799）³¹であった。「古のパリ。パレ・ド・ジュスティス、5月広場を囲む建物の取り壊し」（図9）はその様子を描いたものである。

ヴァセロの地図（Atlas Vassero, 1810-1836）（図10）³²を確認すると宝物庫は描かれておらず、19世紀前半には宝物庫はなくなっていたことが分かる。また、「5月広場」の名称は「パレ・ド・ジュスティス広場」に代わり、広場に面した建築は前述の18世紀末に再建されたものとなっている。したがって、ラブルーストの時代には宝物庫は既に取り壊されていて、ヴィレール＝デュクをはじめとする19世紀の建築家や画家の図版は復元研究であったことを改めて確認することができた。ヴァセロの地図は1810年から1836年にかけてフェリベール・ヴァセロ（Philibert Vasserot, 1773-1840）により作成されたパリの地図であり、この地図は正確であると同時に建物内部の壁面などの詳細が描かれていることに特徴がある。19世紀前半のパリの都市と建築の様子を知ることができる資料として高く信頼されている。描写表現の美しさが著名であり、ヴァセロはエコール・デ・ボザール出身の建築家であった。ヴァセロはラブルーストの先輩に当たる。

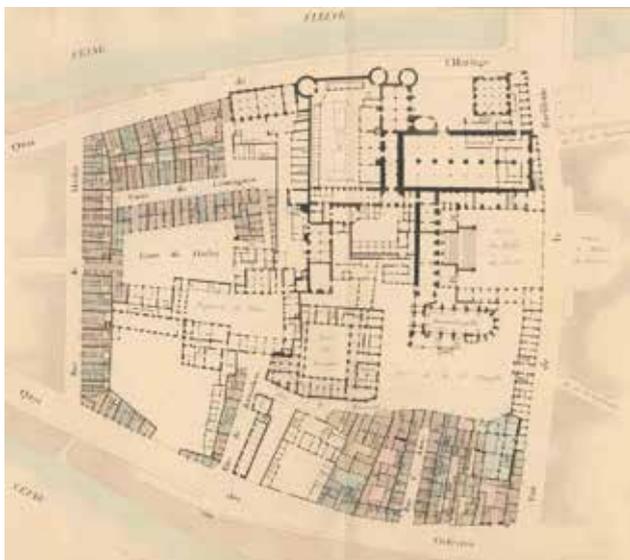


図10：「19世紀前半のパレ・ド・ジュスティス」。ヴァセロの地図より。

5. まとめ

王の年代記などの文献に記録が残るルイ9世の図書館は、その存在は伝承の域を超えないと考えられていたが、今回の研究により、この図書館の建築としての存在がより明らかになった。場所はシテ宮の中庭、サント＝シャペルの北隣である確定して良いであろう。これらは新しい発見であった。加えて、19世紀では図書館があった宝物庫の平面と外観について著名な建築家や研究者たちが復元研究を行っていたことに驚きがあり、その価値の高さを示して

いる。そこから得られる様相からもこの図書館が小規模ながらも優遇されていた様子が伝わってくる。総じて、この図書館が設置されていたサント＝シャペル宝物庫の存在は想像以上に確かなものであり、質の高い建築であったと推測することができた。宝物庫にサント＝シャペルと同様な平面や断面の構成と構造技術が与えられたことはこの宝物庫の格式の高さを示していると解釈される。同図書館が王宮広場内にサント＝シャペルと並んで建つ宝物庫の中に設けられたことはこの図書館の恵まれた様子を伝えている。加えて、中世では写本である書籍は貴重品であり、芸術品や金貨や宝石などの貴重品と同様な扱いを受けていたことと、この図書館が恵まれた場所に配置されていたことを考慮すると、書籍が宝物にも近い特別な扱いを受けていた様子を、実例として知ることができたことは有意義であった。総じてフランス国立図書館の端緒は、中世の城塞のルーヴルに所在した14世紀のシャルル5世の図書館に加えて、それ以前の図書館として13世紀のサント＝シャペル宝物庫内のルイ9世の図書館に言及することが適切であると判断することができた。

一方、本研究では18世紀に描かれた都市図からは中世のシテ宮全体の様子や、王宮の建築の平面の構成や空間などの特徴を理解できたことも有意義であった。特徴として一つには広い中庭が設けられていることが挙げられ、もう一つは大広間を始めにシテ宮の幾つかの建築が中央軸に列柱が配置された平面構成となっていることである。中央軸列柱の構成は西洋建築史全体において稀であり、この形式はフランスでは16世紀のフランス・ルネサンス以降は殆ど見ることはない。アンリ・ラブルーストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館では中央軸列柱の構成が採用されているが、これも稀な例であり、この構成が19世紀の記念碑的建築に採用されたことは特殊な事例である。構造においてはサント＝シャペルとその宝物庫に見られる堅固な控え壁が水平力を支えて大きな開口を設ける考え方や、サント＝シャペル下階の軸力のみを支える独立柱と、上階の同じく軸力のみを支える細く繊細な添え柱に見られる特徴は、ラブルーストの最も優れた特徴である構造意匠「箱入れ構造」と共通する原理を見出すことができる。

加えて、今回の研究では、サント＝シャペルと宝物庫が19世紀の芸術家たちにデッサンや版画として描かれ、19世紀では既に取り壊されていた中世シテ宮の建築や広場が芸術の題材とされていたことが明らかになり、興味深い発見があった。また、研究の観点からはヴィレール＝デュクやホフバウアーのような著名な人物がサント＝シャペルと宝物庫に関する復元研究を残していたことも、価値を高めている。彼らの研究からは宝物庫の存在の確実性を高めることができ、加えて、シテ宮のフランス・ゴシック建築の連続性を理解することができた。これらからは19世紀の建築家、芸術家、研究者たちがいかに中世のシテの王宮に着目していたのかを理解することができ、総じて19世紀における中世建築への意識の高まりや探求の興隆として結論付けることができる。

19世紀に修復（1836-）が行われたサント＝シャペルと19世紀の建築家との関わりは深く、歴史的建造物の建築家として修復の任命を受けた人物はジャック＝フェリッ

クス・デュバン (Jacques-Félix Duban, 1797-1870, 1836-1848)、ジャン＝バティスト＝アントワヌ・ラスュス (Jean-Baptiste-Antoine Lassus, 1807-1857, 1848-1857)、エミール・ボズウィルワルド (Émile Boeswillwald, 1815-1896, 1847-) である。ヴィレール＝デュクはこの修復の建築家として任命を受けていなかったが、協力者であった。この4の建築家はそれぞれアンリ・ラブルーストと近い人物であり、デュバンはローマ留学を共にした生涯の親友であり、ラスュス、ボズウィルワルドはラブルーストのアトリエで学んだ直弟子である³³。ヴィレール＝デュクは合理的な建築思想をラブルーストと共にし、弟子が行き来する関係であった。サント＝シャペルの修復はサント＝ジュヌヴェーヴ図書館の設計建設と同時期に行われていた。一方、ラブルースト自身もパレ・ド・ジュスティスに関係のある人物であり、彼が優勝、準優勝したローマ大賞コンクールの主題は「最高裁判所」(1824)、「裁判所」(1821)であった。これらのコンクールはパレ・ド・ジュスティスの建設が背景にあり、パリのパレ・ド・ジュスティスは設計と工事が漸次的に行われ、19世紀後半の設計を担当した建築家は、ラブルーストのローマ留学時代からの友人ジョゼフ＝ルイ・デュク (Joseph-Louis Duc, 1802-1879) であった。これらについては別の機会に詳細を述べたい。

本稿で論じてきた諸点を考慮に入れるならば、フランスで最初の王によるルイ9世の図書館は優美で繊細なサント＝シャペルにも近い恵まれた建築の中にあり、フランス国立図書館はその端緒においても人類の知的遺産を後世に伝えるという図書館の意義深い役割とその価値の高さが示されていた。同時に、この建築は19世紀の優れた研究者や建築家、芸術家たちとの関係があり、これらの事象は後の19世紀のパリ国立図書館の誕生と、20世紀のフランス国立図書館の栄光を予兆しているかのようである。

謝辞：

本研究はJSPS科学研究費補助金(科研費)の助成を受けたものである。基盤研究(C)、17K06749、『パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流』。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Research (C). 2017年の8月の現地調査では建築家のブリュノー・ゴードン氏とヴィルジニー・ブレガル (Virginie Brégal) 氏、修復建築家のジャン＝フランソワ・ラノー (Jean-François Lagneau) 氏とパトリス・ジラル (Patrice Girard) 氏をはじめにフランス国立図書館、サント＝ジュヌヴェーヴ図書館の方々、パリ国際大学都市スイス館の方々から多くの支援と協力を賜りました。心から感謝とお礼を申し上げます。

参考文献：

フランス国立図書館関連：アンドレ・マソン、ポール・サルヴァン、『図書館』、小林宏訳、文庫クセジュ、白水社、1969年、Masson, André., Paule Salvan, *Les Bibliothèques*, collection Que sais-je?, Presses Universitaires de France, 1961, Paris. Blasselle, Bruno., *La Bibliothèque nationale*, Presses Universitaires de France, 1989, 1993. Blasselle,

Bruno., Jacqueline Melet-Sanson, *La Bibliothèque nationale de France, Mémoire de l'avenir*, Découvertes Gallimard Histoire, Paris, 1990, 2006.

サント＝シャペル、シテ宮、パレ・ド・ジュスティス関連：Favard, Jean., *Au cœur de Paris, un palais pour la justice*, Découvertes Gallimard, Paris, 1995. Finance, Laurence de, Delon, Monique., *La Conciergerie, palais de la Cité*, Éditions du Patrimoine, Paris, 2000. *La Sainte-Chapelle*, collection Itinéraires, Editions du Patrimoine, Paris, 2012. Perrot, Françoise., *La Sainte-Chapelle de Paris*, collection Regards, Éditions du Patrimoine, Paris, 2013. *Connaissance Arts*, "Palais de la cite", février Paris, 2014. Leniaud, Jean-Michel., Françoise Perrot, *La Sainte Chapelle*, Éditions du Patrimoine Centre des monuments nationaux, Paris, 2016. アンリ・ラブルースト関連 (和書)：ピエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブルースト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴慶編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。白鳥洋子、「アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち：18世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要第18号、pp. 59-74、2012年3月。白鳥洋子、『アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流』、博士論文東京大学大学院工学研究科博士課程。白鳥洋子、「アンリ・ラブルーストのエコール・デ・ボザール時代：コンクール・デミュレーションにおける18世紀の啓蒙性と近代建築の予兆」、長岡造形大学研究紀要第14号、pp.6-16、2017年4月。建築史：『西洋建築史図集』、日本建築學會編、3訂第2版、彰国社、1981。三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。ルイ・グロデッキ、『ゴシック建築』、翻訳前川道郎、黒岩俊介、図説世界建築史8、本の友社、1996、Grodecki, Louis., *Gothic Architecture*, History of World Architecture, Rizzoli International Publication, New York, 1985. ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築 1』、図説世界建築史13、土居義岳訳、本の友社、1998、Middleton, Robin., David Watkin, *Neoclassical and 19th Century Architecture*, vol. 1, Electa, Milano, 1980. ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築 2』、図説世界建築史14、土居義岳訳、本の友社、2002、Middleton, Robin., David Watkin, *Neoclassical and 19th Century Architecture*, vol. 1, Electa, Milano, 1977. 用語の解説：『仏和大辞典』、伊吹武彦著、他、白水社、1981、『建築大辞典』、第2版、彰国社、1993、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、『広辞苑』、第六版、新村出編、岩波書店、2008、『ブリニカタ国際大百科事典』、2010、*Encyclopédie Larousse en ligne*, *Encyclopædia Universalis*, Éditions en ligne de l'École des chartes, data.bnf.fr, bibliothèque nationale de France. 『フランス史1：先史～15世紀』、世界歴史大系、山川出版社、1995。

図版出典

図1：Reconstitution du louvre du treizieme siecle par M. Hoffbauer. 図2：Plan de Paris par Truschet et Hoyaux, plan de Bâle, Seefeld, Zurich, vers 1550. BNF. 図3：Plan

détaillé de la Cité dédié à Messire Louis Basile de Bernage conseiller d'état prévôt des marchands et à messieurs les échevins de la ville de Paris par M. l'abbé Delagrive, 1754. BNF. 図 4 : Hoffbauer, Theodor Josef Hubert., *Paris à travers les âges, aspects successifs des monuments et quartiers historiques de Paris*, Firmin-Didot, Paris, 1875-1882, pl.V. 図 5 : Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Tome 2, B. Bancel Éditeur, Paris, 1854-1868, pp.426-427. 図 6 : Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Tome 7, B. Bancel Éditeur, Paris, 1854-1868, p.7. 図 7 : Clerget, Hubert., Paris vieux- Palais de Justice. BNF. 図 8 : Palais de Justice. Paris 1660, BNF. 図 9 : Ancien Paris. démolition des Bâtiments formant la Cour de Mai, BNF. 図 10 : Le cadastre de Paris par îlot, dit Atlas Vasserot (1810- 1836) , AP. ML: Musée du Louvre. BNF: Bibliothèque nationale de France. AP:Archives de Paris.

注釈

- ¹ ラブルーストの設計で知られる旧パリ国立図書館は 19 世紀と 20 世紀の文献ではしばしば「国立図書館」、「パリ国立図書館」とされている。開館時は第二帝政期であり、「帝立図書館 (Bibliothèque Impériale)」であった。
- ² 旧パリ国立図書館はその起源と場所に因んで「シット・リシュリユー」と呼ばれている。仏語のシット (site) は英語のサイトに当たり、「場所」、「位置」、「敷地」を意味し、リシュリユー・サイトと訳すと理解しやすい。日本語では「リシュリユー館」と訳されることが多い。シット・リシュリユーはオテル (Hôtel) やギャルリー (Galerie)、アンプリメ (Imprimés)、サル (Salle) 呼ばれる複数の建築の集合体であることから、「館」よりは「サイト」や「シット」の方がより相応しい。「リシュリユー館」の和訳が定着し始めていることから、本稿では建築を示す時は「リシュリユー館」とする。
- ³ アンリ・ラブルーストはサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 (Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-50)、パリ国立図書館の 2 作品で知られる。両図書館において彼は記念碑的な公共建築に鉄構造を露出により使用し、古典主義の建築に近代の新しい技術を導入した早期の事例としてその意義が認められている。近代建築史においては鉄構造の新たな展開へ貢献したという技術的な観点から彼の革新性を認める見解が一般的である。また、西洋建築史においては、ラブルーストは 19 世紀フランスの古典主義の建築の系譜における厳格な規範の踏襲に対して合理主義を追求し、幅広い表現を許容するロマン主義を確立した建築家とされる。それにより狭義の古典主義からの「転換」に貢献し、その後の新たな潮流を築いた建築家として解釈される。ラブルーストに関する参考文献 (和書) は文末に記載した。
- ⁴ ブリュノー・ゴードン (Bruno Gaudin) : 建築家。国立高等建築大学パリ・ラ・ヴィレット (École Nationale Supérieure d'Architecture de Paris La Villette) 教授。

建築家アンリ・ゴードン (Henri Gaudin, 1933-) の息子であり、アンリ・ゴードンの代表作品シャルレティのスタジアム (Stade Charléty, 1991-1994) は両者の共同設計である。

- ⁵ 国立図書館が建設された 19 世紀では納本制度により蔵書が著しく増加し、それらを所蔵する必要があった。
- ⁶ シャルル 5 世 : ヴォロワ朝第 3 代目の国王。「賢明王 (le Sage)」とも呼ばれる。政治改革と税制改革を行い、国庫を充実させ、軍備を増強し王権を強化した。学芸を愛好し、彼の収集した書籍は後のフランス国立図書館の端緒となった。一般的な用語の解説に関する参考文献は文末に記載した。
- ⁷ Blasselle (1989), p.9. Blasselle (1990), p.18. ブリュノー・ブラセルはフランス王立図書館の起源をシャルル 5 世の図書館としている。ブラセルは考古学者、歴史家。フランス国立図書館の管理者 (Conservateur)、国立図書館アスナル館の館長 (-1998)。図書館と本の歴史の著書で知られる。
- ⁸ ルイ 9 世 : カペー朝第 9 代目の国王。12 歳で即位。フランス封建王政の最盛期の王であり、正義の王とされた。王領内の集権化を促進し、王室直轄領を拡大した。パリのシテ島にサント＝シャベルを建設した。王領内の私戦を禁止し、裁判部門であるパリ高等法院を国王政府から独立させた。ルイ 9 世は第 7 次、第 8 次と 2 度の大規模な十字軍遠征を行い、1248 年に第 7 次十字軍を率いてエジプトに遠征し、敗北して捕虜となったが、後に釈放された。1270 年の第 8 次十字軍ではチュニジアを攻め、同地を包囲したが、疫病のため陣中に没した。1297 年に聖人に列せられ、聖ルイ、聖王ルイ、聖王ルイ 9 世と様々な呼称で呼ばれる。本稿ではルイ 9 世とした。シテ島の東隣のサン＝ルイ島の由来は聖 (サン) ルイである。
- ⁹ Mason (1961), p.31. アンドレ・マソンは「何人かのフランス国王が、自分の図書館を学者たちに利用させるために払った努力を、黙過するのは当を得ていないであろう」としている。
- ¹⁰ fauconnerie は「鷹狩り」を意味する。
- ¹¹ ルイ 12 世 : ヴァロア朝第 8 代目の国王。イタリア戦争により 1500 年にミラノを征服したが、1513 年にフランス軍はミラノから追放された。国内では地方習慣法の編纂、裁判訴訟制度の改善、治水、道路整備に尽力した。1506 年に全国三部会で「民衆の父」に称号を授けられた。
- ¹² フランソワ 1 世 : ヴァロア朝第 9 代目の国王。北イタリアに出兵し、イタリア戦争を続けた。国内では王権を強化し、行政機構、徴税制度を整備し、高等法院を再組織した。貴族、教会の勢力を削減し、絶対王政の中央集権体制の確立へ貢献した。豪華な宮廷生活を愛好し、学芸を保護した。
- ¹³ その国で刊行された出版物を国立図書館などの指定図書館に納本することを義務とした制度。フランソワ 1 世による 1537 年のデポ・レガルは世界で最初の納本制度であり、以後、世界各国で行われるようになった。日本では 1946 年の国立国会図書館法 (25 条) に基づき、

新刊書を発行日より30日以内に同館の納めることを定めている。

- ¹⁴ リシュリユー：フランス17世紀の政治家、枢機卿。ルイ13世の宰相を18年間務め、王権を強化した。新教徒を弾圧し、1628年にその拠点ラロシェルを制圧した。海外貿易を奨励した。集権国家を構想し、フランスを中世的国家から近代的国家へと導いた。芸術と文芸を奨励し、1635年にアカデミー・フランセーズを設立。後継者はマザランとなった。
- ¹⁵ マザラン：イタリア出身のフランスの枢機卿、政治家。リシュリユーの信頼を得て、彼の死後、王妃アンヌ・ドートリッシュ（Anne d'Autriche, 1601-1666）の寵愛を受け、宰相として摂政政治を推進し、ルイ14世の政治教育を行った。三十年戦争を終わらせ、国内では集権体制の強化し、徴税請負制度を行った。それらの不満がフロンドの乱を誘発した。ルイ14世のフランス優勢時代の基礎を築いた。
- ¹⁶ フランス国立図書館の歴史に関する参考文献は文末に記載した。
- ¹⁷ サラセンの呼称は古くはギリシア・ローマ人がシリア砂漠の遊牧民をSaraseniと呼んでいた。7世紀のイスラムの勃興からはビザンチン人がイスラム教徒一般を示す言葉としてこれを採用し、十字軍を通じて西ヨーロッパにもこの呼称が広がった。
- ¹⁸ Masson (1961), p.31.
- ¹⁹ アラン・サン＝ドニ、『聖王ルイの世紀』、福本直之訳、文庫クセジュ、白水社、2004。Saint-Denis, Alain., *Le siècle de Saint-Louis*, collection Que sais-je?, Presses Universitaires de France, 1992.
- ²⁰ シテ宮に関する参考文献は文末に記載した。
- ²¹ シテ宮とパレ・ド・ジュステイスの位置関係は後述するドラグリーヴの「シテの都市詳細図」とヴァセロの地図により検証を行った。
- ²² サント＝シャベルに関する参考文献は文末に記載した。
- ²³ レイヨナン様式：13世紀中頃から14世紀後半の盛期ゴシックの建築様式。この頃ゴシック建築は技術的に最高の発展を示し、壮大なステンドグラスや骨組みが極度に細いトレーサリーなどの繊細で華麗な装飾に特徴がある。レイヨナン様式の代表作品としてランス大聖堂（Cathédrale de Reims, 1211-13世紀末）、ボーヴェ大聖堂（Cathédrale Saint-Pierre à Beauvais, 1247-1272）などが挙げられる。
- ²⁴ 『西洋建築史図集』（1981）、p.158。
- ²⁵ ゴシック建築の窓の網目文様の格子はフランス語ではランブラージュ（remplage）であるが、本稿では日本で一般的に採用されている英語のトレサリー（tracery）とした。
- ²⁶ ドラグリーヴ修道院長、ジャン・ドラグリーヴ（Jean Delagrive）：ラザリスト会の神父、地理学者であり、18世紀フランスの幾何学と作図の発展に貢献した。パリ市の地理学者として幾何学的に正確で詳細な同市の地図を作成した。
- ²⁷ *Plan détaillé de la Cité dédié à Messire Louis Basile de Bernage conseiller d'état prévôt des marchands et*

à messieurs les échevins de la ville de Paris par M. l'abbé Delagrive, 1754.

- ²⁸ Hoffbauer, Theodor Josef Hubert., *Paris à travers les âges*, aspects successifs des monuments et quartiers historiques de Paris, Firmin-Didot, Paris, 1875-1882, pl.V.
- ²⁹ Viollet-le-Duc, Eugène Emmanuel., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Tome 2, B. Bancel Éditeur, Paris, 1854-1868.
- ³⁰ Favard (1995), pp.50-51, p.105.
- ³¹ ジャック＝フランソワ・ブロンデル（Jacques-François Blondel, 1705-1774）の弟子。王立建築アカデミー会員（1773年）。
- ³² ヴァセロの地図：「ヴァセロの地図」は通称であり、正式名称は「区画によるパリの土地台帳（Le cadastre de Paris par îlot）」である。しばしばヴァセロの地図表現の美しさが言及される。ヴァセロはボザールではアシル＝フランソワ＝ルネ・ルクレール（Achille-François-René Leclère, 1785-1853）に師事した。
- ³³ フランス19世紀の建築に関する解説は主に Middleton (1977)、三宅 (1982) を参照した。